

近畿地方における国府石器群の再検討

The Reexamination of Kou Industry inKinki Region

伊 藤 栄 二

Eiji ITO

奈良大学大学院文化財史科学専攻博士前期過程 三年

I はじめに

近畿地方における旧石器編年研究は、ナイフ形石器の型式学的変遷による編年研究（鎌木・高橋 1965）で提示された瀬戸内技法の崩壊過程およびナイフ形石器の小型化という視点にもとづき石器群の変遷が把握されているのが現状である（松藤 1992、久保 1999など）。そのなかで国府石器群は一定地域に頻繁に見られる考古学的型式の一定の組み合わせとして評価され、時期区分としての国府文化期（国府期）が設定されている。

しかし、90年代以降、翠鳥園遺跡、長原遺跡97-12次調査地などの発掘調査によりブロックを伴う良好な一括資料が確認され、瀬戸内技法を有する石器群の増加と石器群の多様性が明確になりつつある。そこで、本論では近畿地方における瀬戸内技法を伴う石器群を対象に国府石器群の再検討を試みるものである。

II 国府石器群研究の現状と課題

国府石器群研究は、二上山北麓の分布調査（同志社大学旧石器文化懇談会1974）、郡家今城遺跡（富成・大船 1978）、国府遺跡（島・山内・鎌木 1957、石神 1972）の発掘調査により、石器組成が単純で瀬戸内技法によって製作された国府型ナイフ形石器を主体的な生産具とする石器群が確認されたのを嚆矢とし（松藤1974）、出土層準、ナイフ形石器の形態・整形技術の差異から古・新に時期区分された（松藤1980）。また、国府石器群の剥片剥離技術が多様であることが明確にされ（柳田 1979）、瀬戸内技法関連資料の有無を基準とする国府石器群の定義が提示された（柳田 1981、以下柳田定義と呼称）。しかし、柳田定義では瀬戸内技法関連資料の量的視点が欠落していたことから、国府石器群は、瀬戸内技法を主要な技術基盤とし、翼状剥片を素材としたナイフ形石器を主体的な生産用具とした石器群と再定義され（松藤 1985、以下松藤定義と呼称）、現状では松藤定義が大半の研究者の共通認識となっている。また、瀬戸内技法の量的割合

の差異は時期差を示しているとされ、いわゆる櫃石島技法を主要な技術基盤とし瀬戸内技法が客体的に伴う八尾南遺跡第3地点、津之江南遺跡B・C地点などは国府石器群に後続する石器群に位置づけられている(久保1989、佐藤 1989)。

国府石器群の編年の位置については広域火山灰と石器群の関係から国府石器群の年代を推定する方法が一般的であり、ATが確認されている遺跡としては桜ヶ丘第1地点遺跡、鶴峯荘第1地点遺跡があげられる。桜ヶ丘第1地点遺跡では第3・4次調査においてD調査区黄褐色シルト層(Ⅱb層)の上部よりATが検出され(横山 1983、横山・松藤・佐藤 1984)、Ⅱb層、Ⅲ層の出土石器は、ATを介してその前後の時期に国府石器群が位置づけられる可能性が指摘されている(松藤1985 a、b)。一方、鶴峯荘第1地点遺跡では土坑2出土の石器がAT降灰以後の所産とされ、土坑の検出面付近では琵琶湖51火山灰(BB51=大山系火山灰)が微量検出されている(佐藤 1986)。同様に、八尾南遺跡第3地点でも大山系火山灰が微量ながら検出されており(福田編 1989)、鶴峯荘第1地点遺跡ときわめて近接した時期の石器群とされている(久保 1989、松藤 1992)。従って、国府石器群の存続期間はあ現状においてAT降灰前後から大山系火山灰の降灰期に求めるのが一般的である(久保 1989、佐藤 1989)。

国府石器群に属する遺跡は、松藤定義に従えば二上山北麓遺跡群、郡家今城遺跡A地点(図1-1)、同C地点(図1-2)、国府遺跡第1地点、同第3地点(図1-3)、はさみ山遺跡85-7区(図1-4)、青山遺跡(図1-5)、林遺跡84-1区SX01(図1-6)、西大井遺跡(図1-7)、古室遺跡(図1-8)、城山遺跡86-1区(図1-9)、翠鳥園遺跡(図1-10)、大山仲町遺跡、鶴峯荘第1地点遺跡土坑2(図1-11)などが該当し(松藤 1992)、国府石器群の分布が大阪平野の周辺部に限定され、とくに二上山北麓地域や羽曳野台地に密集する状況がみてとれる(図1)。つまり、国府石器群の分布は、サヌカイトの原産地およびその周辺地帯に



図1 近畿地方中央部における国府石器群の分布
(趙 1994 一部改変)

偏在することが明確であるといえる。

以上、国府石器群研究の現状を定義、編年的位置、分布から整理をおこなった。次に、編年の分析単位、瀬戸内技法の量的割合の評価、分布状況から国府石器群研究の問題点を抽出し、国府期において国府石器群に併行する石器群が存在する可能性を検討する。

従来、1遺跡・1文化層の石器群が編年の分析単位とされてきたが（杉原 1956、戸沢 1965など）、近畿地方のような層位的条件が劣悪な地域では各自然層での出土石器を一括遺物として把握し、1遺跡・1文化層の出土石器を編年研究の基本単位にすえることは極めて困難な状況であるといえる。そこで、遺跡内において石器の分布が一定の範囲に集中する状況（ブロック 月見野遺跡群調査団 1969）に着目し、ブロックの形成過程が極めて短期間であるという前提にもとづきブロックの出土石器を、一括遺物（石器群）として把握し、編年研究の分析単位として扱うのが有効であるといえる。その際には一括遺物の同時性をブロック内での遺物の接合関係から検証していくことが重要である。

石器群に占める瀬戸内技法の量的割合の差異については、単純に時期差を示すだけでなく石材補給の段階差が想定され（絹川 1994）、原産地からの距離の関係を背景として遠隔地の遺跡では非瀬戸内技法の比率が増加する可能性が論じられている（山口 1994）。従って、石器群の技術的基盤を検討する際には、石器群における石材消費過程のあり方を明確にし、瀬戸内技法の量的割合の差異が形成される背景を慎重に検討することが重要である。近畿地方中央部における国府期の遺跡では、二上山産のサヌカイト石材を圧倒的に多用する傾向にあり、原産地からの放射状の石材供給が想定されている（山口 1983）。さらに、瀬戸内技法関連資料の遺物組成から、国府期における石器製作工程の異所展開の存在が予測され、サヌカイト石材供給システムと瀬戸内技法の工程展開の強固な関係が明確にされている（山口 1994）。また、原産地遺跡と消費地遺跡において瀬戸内

技法の運用の構造に差異が認められ、消費地遺跡では作業面補正や意図的な打点の移動行為の出現頻度が高く、横長剥片石核等への転用の可能性が論じられている（絹川 1993）。以上のことは、国府期のすべての遺跡において瀬戸内技法が剥片剥離技術の主体を占めるのかを検討し（藤野 1994）、国府石器群に併行する石器群の存在を追求する必要性を示唆しているといえる（森川 2001）。

そこで、国府石器群の分布状況を見てみると、国府石器群の分布が原産地およびその周辺地帯に偏在することは明確であり、国府期において国府石器群に併行する石器群が消費地（遠隔地）遺跡において存在する可能性は否定できない。また、国府期の直後に該当する津之江南C期（松藤 1980）、グループ5（佐藤 1989）、3b段階（久保 1994）の遺跡を概観すると、いずれも消費地的な様相を示す石器群のみが提示され、それに対応する原産地的な様相を示す石器群は皆無であり、時期設定の条件として原産地および消費地的な様相を示す石器群のセット関係を重視する必要性を指摘しておきたい。次に、近畿地方中央部に位置する各遺跡のブロックを規模、分布状態から類型化し、石器製作作業の内容（工程）との関係を検討することによりサヌカイトにおける石材消費過程の様相を検討する。

Ⅲ ブロックの類型化と石器製作作業の内容（工程）

近畿地方中央部では群家今城遺跡C地点、八尾南遺跡第2・3・6地点、長原遺跡89-37次・97-12次調査地などの遺跡でブロックが確認されており、規模・石器の分布状態・接合関係の頻度からブロックをⅠ～Ⅲ類に区分する。以下にその内容を示すと、Ⅰ類は石器点数が百点以上で石器分布が密集し接合関係の頻度がたかい大規模なブロック（図2）、Ⅱ類は石器点数が数十点以上で散漫かつ広範囲に石器が分布し接合関係はⅠ類ほど認められない中規模なブロック（図3）、Ⅲ類は石器点数が十点前後で散漫な分布を示し接合関係はほぼ皆無である小規模なブロックである。

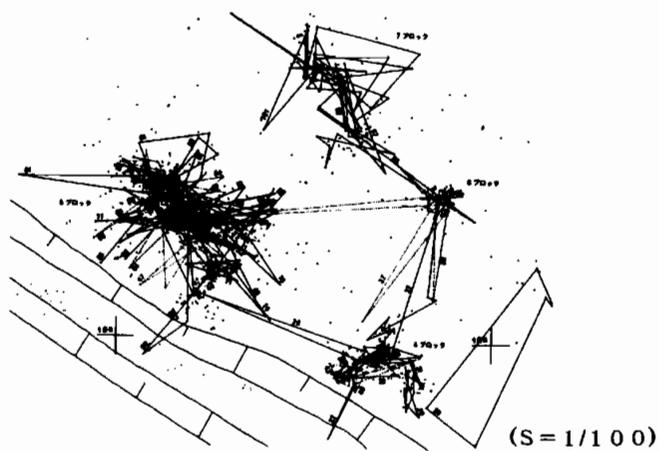


図2 I類ブロックの石器分布（八尾南遺跡第6地点）

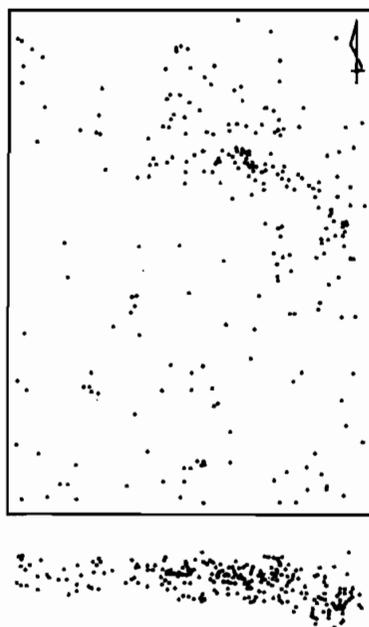


図3 II類ブロックの石器分布（八尾南遺跡第3地点）

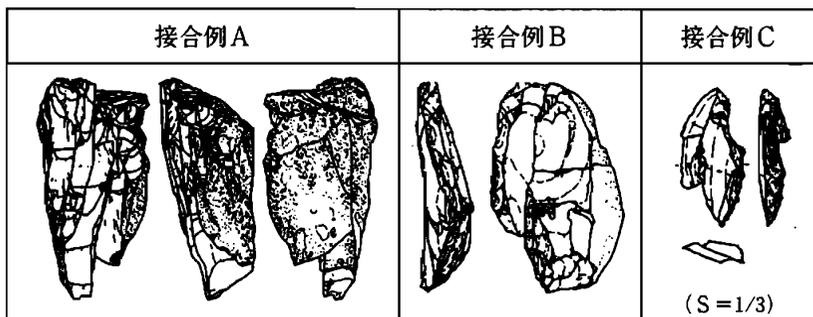


図4 接合例A～C（長原遺跡97-12次調査地）

次に、各遺跡における石器製作作業の内容（工程）を、接合資料および残滓の特徴、瀬戸内技法関連資料の遺物組成から、一連の石器製作工程（原礫分割工程～調整加工工程）が遺存するa類、部分的な剥片剥離作業と製品の製作（剥片剥離工程～調整加工工程）のみが遺存するb類、石器製作作業の痕跡がほぼ皆無なc類に類型化して把握する。具体的には、接合資料を多数の石核と剥片が接合し原石の状態がほぼ復元できる接合例（接合例A）、多数の剥片や石核と剥片の接合例（接合例B）、剥片数点の接合例（接合例C）に区分し（図4）、接合例A～Cの量的評価により石器製作作業の内容（工程）を把握する。また、瀬戸内技法の各工程の組成比を比較すると、第1工程～第3工程が認められ第1工程が顕著である遺跡と第1工程がほぼ皆無で第2工程が主体を占める遺跡に区分が可能であり（山口 1983、1994）、前者は石器製作作業の内容（工程）a類に、後者はb類にほぼ対応する。二上山北麓遺跡群の大半の遺跡（鶴峯荘第1地点遺跡、桜ヶ丘第1地点遺跡など）、国府遺跡第3地点などはa類に、郡家今城遺跡C地点、はさみ山遺跡、八尾南遺跡第3地点はb類に対比することが可能である。そこで、ブロックの類型ごとに石器製作作業の内容（工程）を検討する（表1）。

I類ブロックでは、接合例Aの存在から石器製作作業の内容（工程）

表1 ブロック属性表

遺跡名	名称	平面分布(m)		点数	接合 点数	接合例			石器群類型		遺跡 類型	
		長径	短径			A	B	C	①	②		
郡家今城遺跡C地点	A群	3	2	129	12			○	Ⅱ	b	Ⅱ	
郡家今城遺跡C地点	B群	3	1.5	15	1			○	Ⅲ	c		
郡家今城遺跡C地点	C群	7	6.5	142	18			○	○	Ⅱ		b
郡家今城遺跡C地点	D群	8	5	74	5			○		Ⅱ		b
郡家今城遺跡C地点	E群	7	5.5	149	14			○	○	Ⅱ		b
郡家今城遺跡C地点	F群	7.2	5	135	17			○	○	Ⅱ		b
郡家今城遺跡C地点	G群	4.5	4	299	20			○	○	Ⅱ		b
郡家今城遺跡C地点	H群	6	5	122	11			○	○	Ⅱ		b
八尾南遺跡第2地点	Aブロック	1.5	1.5	37	20				○	Ⅱ	c	Ⅰ
八尾南遺跡第2地点	Bブロック	1	1	6	2					Ⅲ	b	
八尾南遺跡第2地点	Cブロック	2	1.4	343	69	○	○	○	○	Ⅰ	a	
八尾南遺跡第2地点	Dブロック	2	2	47	10			○	○	Ⅱ	b	
八尾南遺跡第3地点	—	—	—	417	30			○	○	Ⅱ	b	Ⅱ
八尾南遺跡第6地点	1ブロック	0.6	0.5	26	2				○	Ⅱ	c	Ⅰ
八尾南遺跡第6地点	2ブロック	1.8	1.5	235	68	○	○	○	○	Ⅰ	a	
八尾南遺跡第6地点	3ブロック	1.6	0.8	61	8			○	○	Ⅱ	b	
八尾南遺跡第6地点	4ブロック	1.5	1	512	107	○	○	○	○	Ⅰ	a	
八尾南遺跡第6地点	5ブロック	2.5	2	1023	274	○	○	○	○	Ⅰ	a	
八尾南遺跡第6地点	6ブロック	0.8	0.5	33	4	○	○	○	○	Ⅱ	a	
八尾南遺跡第6地点	7ブロック	1.8	1.5	129	56	○	○	○	○	Ⅰ	a	
八尾南遺跡第6地点	8ブロック	1.7	1	186	31	○	○	○	○	Ⅰ	a	
八尾南遺跡第6地点	9ブロック	2	2	35	5			○	○	Ⅱ	b	
八尾南遺跡第6地点	10ブロック	1.2	1.2	34	8			○	○	Ⅱ	b	
長原遺跡97-12次	LC1301	11	11	395	279	○	○	○	○	Ⅰ	a	Ⅰ
長原遺跡97-12次	LC1302	3	3	7						Ⅲ	c	
国府遺跡第3地点	—	—	—	251	10			○	○	Ⅱ	a	Ⅰ
はさみ山遺跡87-7区	北西ユニット	11	4	238						Ⅱ	b	Ⅱ

(凡例) 石器群類型 ①ブロック ②石器製作作業の内容

a類に対比できる。Ⅱ類ブロックでは原則として接合例B・Cのみであり、石器製作作業の内容(工程)b類に対比できるが、八尾南遺跡第6地点6ブロックのみは、一定量の接合例Aの存在から石器製作作業の内容(工程)a類に該当する。Ⅲ類ブロックでは石器製作の痕跡がほぼ皆無であり、出土点数、製品の割合が高いことから石器製作作業の内容(工程)c類に対比できる。従って、Ⅰ類ブロックには石器製作作業の内容(工程)a類、Ⅱ類ブロックにはb類、Ⅲ類ブロックにはc類がほぼ対応し、ブロックの類型ごとに石器製作の作業内容に大きな違いが認められる。また、ブロッ

ク規模の縮小とともに石器製作工程の欠落部が拡大する傾向にあることから、ブロック類型とサヌカイト石材の石器製作作業の内容（工程）との間には相関関係が存在するといえる。

そこで、以上のブロックおよび石器製作作業の内容（工程）の各類型を、各遺跡の石材消費過程の様相を明確にする目的から、Ⅰ類及びⅡ類遺跡に区分する。以下にその内容を示すと、Ⅰブロックを含む複数のブロックで構成される大規模な遺跡で石器製作作業の内容（工程）a類を示すⅠ類遺跡、Ⅱ・Ⅲ類ブロックのみで構成される中規模以下の遺跡でb・c類を示すⅡ類遺跡である。Ⅰ類遺跡は大規模遺跡でサヌカイト石材の石器製作作業の内容（工程）から石器製作工程の全工程が認められる原産地的な様相を示す石器群（原産地石器群）としての評価が可能であり、長原遺跡97-12次調査地、八尾南遺跡第6地点などが該当する。また、ブロックは未検出であるが、二上山北麓遺跡群における大半の遺跡や国府遺跡第3地点も石器製作作業の内容（工程）からⅠ類遺跡に帰属させることが可能であり、Ⅰ類遺跡の分布は、二上山北麓およびその10km圏内に位置する羽曳野台地、瓜破台地のみ分布するのが特徴である（図1）。一方、Ⅱ類遺跡は、中規模以下の遺跡で石器製作工程の初期工程がほぼ欠落する消費地的な様相を示す石器群（消費地石器群）としての評価が可能であり、群家今城遺跡C地点、八尾南遺跡第3地点、はさみ山遺跡が該当し、ブロックが未検出の津之江南遺跡、藤阪宮山遺跡、星田布懸遺跡も石器製作作業の内容（工程）からⅡ類遺跡に帰属させることが可能である。Ⅱ類遺跡の分布は、原産地から遠隔地に位置する淀川流域に分布が密集するが、はさみ山遺跡、八尾南遺跡第3地点のように原産地周辺にも分布が認められ（図1）、サヌカイトの石材消費過程を単純に原産地との距離的關係のみで理解するのは危険である。従って、石器群の比較には一定範囲における石材環境を明確にすることが重要であり、現状では最終氷期最寒冷期の古大阪平野の古地理に関する研究（趙 1994）により推定復元された当時の各河川や台地

などの地理的特徴や遺跡の疎密を基準に、近畿地方中央部を淀川流域地域、古東除川流域（瓜破台地）地域、石川流域（羽曳野台地）地域、二上山北麓地域に区分したうえで石材環境を認識するのが妥当である。次に、瀬戸内技法の量的割合の把握方法を提示し、群家今城遺跡 C 地点、国府遺跡第 3 地点、はさみ山遺跡、八尾南遺跡第 3 地点の石器群を対象に瀬戸内技法を伴う石器群の具体的分析をおこなう。

IV 瀬戸内技法を伴う石器群の様相

近畿および瀬戸内地方では石核素材に剥片が用いられ、石核底面の平坦な剥離面の意図的な取り込みを目的とする剥片（有底剥片）を生産する有底剥片剥離技術（絹川 1996）が石器群の主要な技術基盤を形成する場合が多く、瀬戸内技法は有底剥片剥離技術が特殊化した石器製作技術と把握することが可能である。そこで、有底剥片素材のナイフ形石器を背面構成の特徴からⅠ～Ⅳ類に、有底剥片を底面の剥離方向、背面構成の特徴から有底剥片 A 1 類～C 類に類型化し（図 5）、両者の関連性から各石器群の有底剥片剥離技術の様相を把握する。ナイフ形石器と有底剥片においては、Ⅰ類と A 1 類、Ⅱ類と A 2 類、Ⅲ類と B 類がそれぞれ対応し、ナイフ形石器Ⅰ類および有底剥片 A1 類はそれぞれ国府型ナイフ形石器、翼状剥片に対比できる。従って、有底剥片剥離技術の関連資料におけるⅠ類および A 1 類の量的比率は、石器群における瀬戸内技法の量的割合の指標として有効である（表 2）。以上、ナイフ形石器と有底剥片との関連性から石器群における瀬戸内技法の量的割合の把握方法を確認したところで、具体的に石器群の分析をおこなう。

群家今城遺跡 C 地点は 1973 年に高槻市教育委員会により発掘調査が実施され、石器および礫群が黄褐色砂質粘土層から出土し、遺物分布の状況から A～H 群に区分されている（富成・大船 1978）。石器は 1114 点出土し、ナイフ形石器、角錐状石器、搔器（先刃形搔器を含む）、削器、彫器、

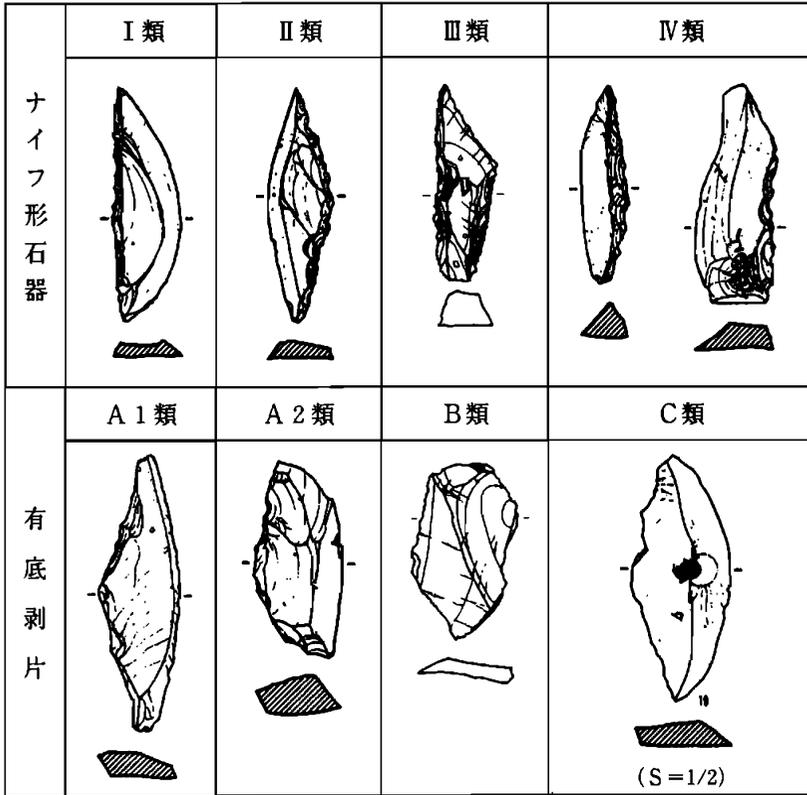


図5 ナイフ形石器・有底剥片類型図

表2 ナイフ形石器・有底剥片類型表

遺跡名	ナイフ形石器						有底剥片					
	I	II	III	IV	不明	合計	A1	A2	B	C	不明	合計
郡家今城遺跡C地点A群	4	1		2	6	13	3	1	1		1	5
郡家今城遺跡C地点B・C群	3	2		1	6	12	6	5		3	2	16
郡家今城遺跡C地点D・E群	4	4		6	8	22	4	5	2	1	1	13
郡家今城遺跡C地点F・G群	4	1		4	3	12	13	3	1	2	1	20
郡家今城遺跡C地点H群	2	1	1		1	5		2				2
国府遺跡第3地点	4	2				6	18	9	5	2		34
はさみ山遺跡87-7区	7	1	2	2	1	13	12	5	3			20
八尾南遺跡第3地点	4	2	2	2	1	11	5	10	12	2		29

縦長剥片、翼状剥片、同石核、盤状剥片、同石核などで構成される。石材は圧倒的にサヌカイトを多用する傾向にあり、チャート、鉄石英、珪質頁岩、溶結凝灰岩、流紋岩なども利用されている。A～H群はⅡ類ないしⅢ類ブロックに該当し、各ブロックの石器製作作業の内容（工程）もb類ないしc類を示すことから、本遺跡は消費地石器群に位置づけられる。また、A～H群のうちB群とC群、D群とE群、F群とG群の石器群は遺物の接合関係から一括資料として認識することが可能であり、分析の都合上それぞれB・C石器群、D・E石器群、F・G石器群と呼称する。ナイフ形石器および有底剥片の類型組成において、A群、B・C石器群、F・G石器群ではナイフ形石器Ⅰ類および有底剥片A1類を主体とするのに対し、D・E石器群ではナイフ形石器Ⅰ類とⅡ類および有底剥片A1類とA2類の量的比率が拮抗する点で相違する。石核は遺跡全体で11点確認されており、そのうち7点が有底剥片石核（うち1点は搔器に転用）であるが、D・E石器群に分布が集中するのにくわえ（7点中5点）、3点の翼状剥片石核のうち2点はD・E石器群に分布している。従って、D・E石器群では国府型ナイフ形石器、翼状剥片、同石核のセット関係が成立しているのに対し、A群、B・C石器群、F・G石器群では翼状剥片石核が皆無であることから、遺跡単位では瀬戸内技法を主要な技術基盤とし、国府型ナイフ形石器の製作を主体とする石器群としての評価が可能であるが、ブロック単位では石器群の様相に相違点が認められる。また、有底剥片石核は、翼状剥片石核のほか作業面が盤状剥片の側縁部に設定されるものや周縁に設定されるものなど多様である。

国府遺跡第3地点は1971年に大阪府教育委員会により発掘調査が実施され（石神 1990）、石器は暗褐色小礫混り土層から約2×3mの範囲に集中して出土しており、ブロックが存在していた可能性が高いと考えられる。石器は251点出土し、ナイフ形石器、搔器、楔形石器、ノッチ、翼状剥片、同石核、盤状剥片、同石核などで構成され、石材はすべてサヌカイトであ

る。ナイフ形石器および有底剥片の類型組成は、ナイフ形石器Ⅰ類および有底剥片 A 1 類を主体とする。石核は41点出土しており、そのうち筆者が実見した32点の石核の特徴を示すと、盤状剥片石核 5 点、横長剥片石核 1 点を除く26点が有底剥片石核で構成され、そのうち17点は翼状剥片石核であることから、国府遺跡第3地点は瀬戸内技法が主要な技術基盤であるといえる。また、盤状剥片と盤状剥片石核、翼状剥片と翼状剥片石核の接合例が複数確認されていることから、遺跡内での瀬戸内技法による石器製作が盛んであったと推測され、石器製作作業の内容（工程）は、瀬戸内技法関連資料の遺物組成から a 類に該当し、原産地石器群に位置づけられる。

はさみ山遺跡85-7区は1985年に大阪府教育委員会により発掘調査が実施され（大阪府教育委員会 1986）、住居状遺構、土坑状遺構が検出されている。石器は暗灰褐色粘質土まじり砂礫層から出土しており、調査区北西側の南北約4.0m、東西約11.0mの範囲にブロック（北西ユニット）が確認されている。北西ユニット出土の石器は238点であり、ナイフ形石器、削器、楔形石器、翼状剥片、同石核などで構成され、すべてサヌカイトが利用されている。北西ユニットはⅡ類ブロックに該当し、ブロックの石器製作作業の内容（工程）も b 類を示すことから、消費地石器群に位置づけられる。ナイフ形石器および有底剥片の類型組成は、ナイフ形石器Ⅰ類および有底剥片 A 1 類を主体とする点で、同一地域に位置する国府遺跡第3地点との類似点が指摘できる。石核は9点出土しておりすべて有底剥片石核で構成され、そのうち翼状剥片石核は3点のみで他の有底剥片石核は作業面が盤状剥片の側縁部や周縁部に設定されるものなど多様な様相を示し、剥片剥離の進行が著しく小形のものが大半である。

八尾南遺跡第3地点は1987年に大阪府教育委員会により発掘調査が実施され、石器は複数の層位から出土しているが、接合関係から同一の石器群と把握されている（福田編 1989）。石器は417点出土しており、ナイフ形石器、削器、敲石、翼状剥片、同石核などで構成され、石材はすべてサヌ

カイトである。なお、角錐状石器とされているものは、形態および調整加工の点で従来の角錐状石器とは相違点が著しいことから、同一器種と認定することは困難である。石器の分布は、狭小な調査面積のため不明な点が多いが、Ⅰブロックとその周辺の散漫な遺物分布範囲を示していると考えられ、Ⅱブロックの存在が予測される。また、石器製作作業の内容（工程）はb類に該当し、消費地石器群に位置づけられる。ナイフ形石器および有底剥片の類型組成は、ナイフ形石器Ⅰ類を主体としつつも、有底剥片はA2類およびB類を主体とし、A1類は希少である。ナイフ形石器の類型組成の特徴は、はさみ山遺跡85-7区と類似する。石核は18点確認されているがそのうち有底剥片石核は12点であり、翼状剥片石核のほか作業面が盤状剥片の側縁部ないし末端側に設定されているものや周縁に設定されるものなど多様であり、剥片剥離が進行した円盤状石核も認められる。翼状剥片石核は3点のみであるが、素材の形状に応じて便宜的に剥片剥離工程が設定された結果との解釈も可能である（絹川 1993）。

V まとめ

以上、郡家今城遺跡C地点、国府遺跡第3地点、はさみ山遺跡85-7区、八尾南遺跡第3地点を対象に瀬戸内技法を伴う石器群を検討してきたが、八尾南遺跡第3地点を除く各遺跡では瀬戸内技法を主要な技術基盤とし、翼状剥片を素材としたナイフ形石器を主体的な生産用具とした石器群であることが再確認できた。しかし、郡家今城遺跡C地点、はさみ山遺跡85-7区では一部のブロックで国府型ナイフ形石器および翼状剥片が主体としない事例が認められるとともに有底剥片石核のうち翼状剥片石核が占める比率が低いことから八尾南遺跡第3地点との類似性が指摘できる。また、八尾南遺跡第3地点とはさみ山遺跡85-7区はナイフ形石器の類型組成において類似した特徴を示している。以上の石器群は、いずれも消費地石器群であり、残核の特徴に多様性がみられ、瀬戸内技法の量的割合が低い

が特徴であるといえる。従って、有底剥片剥離技術を主要な技術基盤としつつも瀬戸内技法が客体的な消費地石器群が、国府石器群と時期的に併行関係にある可能性は否定できない。

本論では国府石器群の現状と課題を整理し、近畿地方中央部における瀬戸内技法を伴う石器群を検討したうえで、国府期には国府石器群を中心とするが、消費地においては瀬戸内技法を伴いつつも主体を占めない石器群が存在することを検証した。今後、二上山から遠隔地に位置する淀川流域で資料の増加が予測され、従来、国府期に後続するとされてきた石器群のうち瀬戸内技法を伴う石器群については国府期に帰属する可能性を検討する必要がある。また、石器群を比較するうえで石材消費過程のあり方を重視し、編年の時期設定において原産地および消費地石器群のセット関係を重視する必要性を指摘した。さらに、石材環境が類似する範囲で石器群を比較する目的から近畿地方中央部を対象に河川単位で小地域区分を設定した。今後、小地域区分ごとに石器群を検討することが重要である。なお、ナイフ形石器の形態組成の問題、角錐状石器を主体とする石器群と国府石器群の関係については本論で扱うことができなかったが、今後の検討課題としておきたい。

本稿作成に於いて、水野正好先生の御指導を賜わった。また、以下の諸先生・諸氏から御教示・御協力を受けた。記して感謝したい。

泉 拓良、酒井龍一、山田隆一、新海正博、野口 淳、森川 実、田部剛
(順不同・敬称略)

参考文献

- 石神 怡 1972 『国府遺跡発掘調査概要Ⅱ』 大阪府教育委員会
 一瀬和夫編 1990 『南河内における遺跡の調査Ⅰ』 大阪府教育委員会
 大阪府教育委員会 1986 『昭和60年度 はさみ山遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会
 鎌木義昌・高橋 護 1965 『瀬戸内地方の先土器時代』 『日本の考古学Ⅰ』 河出書房

- 絹川一徳 1993 「瀬戸内技法に関する二、三の考察」『岡山大学文学部紀要』第19号
岡山大学文学部
- 絹川一徳 1996 「近畿地方および中・四国地方のAT降灰以降の石器群」『石器文化
研究5 シンポジウム AT降灰以降のナイフ形石器文化』石器文化研究会
- 久保弘幸 1989 「大阪湾岸地域における小型ナイフ形石器とその編年について」『旧
石器考古学』38 旧石器文化談話会
- 久保弘幸 1994 「瀬戸内技法を伴う石器群の変遷」『瀬戸内技法とその時代』中・四
国旧石器文化談話会
- 久保弘幸 1999 「近畿地方におけるナイフ形石器の形態変遷」『考古学に学ぶー遺構
と遺物ー』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 佐藤良二 1989 「近畿地方におけるナイフ形石器の変遷」『旧石器考古学』38 旧石
器文化談話会
- 島 五郎・山内清男・鎌木義昌 1957 「河内国府遺跡略報」『日本考古学協会第20回
総会研究発表要旨』日本考古学協会
- 趙 哲済 1994 「大阪平野の旧石器遺跡ー特に古大阪平野における遺跡の立地につい
てー」『瀬戸内技法とその時代』中・四国旧石器文化談話会
- 同志社大学旧石器文化談話会編 1974 「ふたがみー二上山北麓石器時代遺跡群分布調
査報告ー」学生社
- 富成哲也・大船孝弘 1978 「郡家今城遺跡発掘調査報告書」高槻市教育委員会
- 福田英人編 1989 「八尾南遺跡ー旧石器出土第3地点ー」大阪府教育委員会
- 藤野次史 1994 「瀬戸内技法の学史的展望」『瀬戸内技法とその時代』中・四国旧
石器文化懇談会
- 松藤和人 1974 「国府型ナイフ形石器をめぐる諸問題」『プレリユード』19 旧石器文
化談話会
- 松藤和人 1980 「近畿西部・瀬戸内地方におけるナイフ形石器文化の諸問題」『旧石
器考古学』21 旧石器文化談話会
- 松藤和人 1992 「大阪平野部における旧石器編年研究に寄せて」『旧石器考古学』44
旧石器文化談話会
- 松藤和人 1985 「瀬戸内技法・国府石器群の現状と課題」『旧石器考古学』30 旧石
器文化談話会
- 森川 実 2001 「近畿地方における横剥ぎ石器群の比較研究ー大阪平野とその周辺の
3石器群を中心にー」『旧石器考古学』30 旧石器文化談話会
- 柳田俊雄 1979 「近畿地方における国府石器群の様相ー剥片生産技術の多様性」『考
古学ジャーナル』No.167 ニュー・サイエンス社
- 柳田俊雄 1981 「国府石器群の分布と年代」『シンポジウム二上山旧石器をめぐる諸
問題』帝塚山大学考古学研究室
- 山口卓也 1983 「旧石器時代における『移動』について」『ヒストリア』第101号 大

阪歴史学会

山口卓也 1994 「二上山を中心とした石材の獲得」『瀬戸内技法とその時代』中・

四国旧石器文化懇談会

山田隆一編 1993 『八尾遺跡Ⅱ－旧石器出土第6地点の調査－』大阪府教育委員会